弔　　辞

信州大学人文学部学部長　　渡邊　秀夫

去る２月20日，本学部教授 谷澤淳三先生急逝の悲報に接し，我が耳を疑い，呆然として天を仰ぎ，痛惜の念やみがたく，いい知れぬ悲嘆にくれております。ましてや，奥様・お嬢様，ご親族の方々のお悲しみ，お嘆きの深さ，いかばかりか，ことばにするすべを知りません。

故 谷澤淳三教授は，1979年（昭和54），東京大学文学部・印度哲学科をご卒業後，同大学院人文科学研究科・博士課程へ進学し，交換留学生としてデリー大学サンスクリット学科へ留学されました。博士課程修了後は，学術振興会特別研究員，東大文学部助手を勤められ，この間，いち早くその優れた研究業績が認められ，「日本インド学・仏教学会賞」を受賞されました。1994年（平成６），信州大学人文学部へお迎えし，助教授として，ここ松本の地に赴任されました。堪能なサンスクリッド語学を縦横に駆使し，古代インド固有の文法学に基づく，原書の精緻な解読・分析を通じ，余人の追随を許さぬ，独自のインド哲学研究を推進して来られました。多くの大学から請われ，そのご研究の一端を講義され，今年度も，母校東大大学院に出講されておりました。多忙な学務委員長の職責を完璧にこなしつつ，週末には学問への篤い情熱を胸に楽しげに上京されるお姿が印象的でした。

学問を愛し，大学を愛し，そして誰よりも学生を愛し，複雑な履修指導やさまざまな悩みごとの相談にも気さくに応じ，分野を超えて多くの学生から厚い信頼を得ておりました。人文学部の教員にはめずらしく，おしゃれなネクタイに濃紺のスーツを上品に着こなし，常に颯爽として，講義はいつも，人文棟全体に響きわたるほどの大きなお声の名調子でした。ドイツの哲学者カントのように，規則正しく端正なご勤務ぶりとともに，折々に，体調管理をも兼ねた水泳にいそしみ，まことに快活・ご健康そのものであった先生が，突然に，余りにも唐突に亡くなられるとは，いまだ信じることができません。

学部長補佐として，国立大学法人化後の困難な学部運営の重責の一端を担い，人文学部の新たな出発に向けた改組の先頭に立ち，ややもすれば極端に走り勝ちな議論の中にあって，繊細なお人柄をにじませた冷静沈着かつユーモア溢れる会話のうちに，多くの貴重なお教えを戴きました。あるいは，この間の積年のご労苦が先生のご体調にストレスを積むことになったのではと案じられてやみません。その改組元年となる新年度への歩みを共にすることも，今はかなわず，輝かしい学部の将来を担うべき，輿望厚い谷澤先生を失いましたこと，返す返すも悔やまれてなりません。

早春の兆しようやくあらたに，今日降る春の慈雨に導かれ，やがて迎える美しい信州の花盛りの季節を前に，再び故人の温顔に触れることはかないません。

花，春ごとに匂へども，主帰らず（『本朝文粋』）

色も香も同じ昔にさくらめど　年ふる人ぞあらたまりける（『古今集』）

同じ昭和20年代の生まれとはいいながら，老年に近づく年上の私が，前途洋々たる逸材の野辺の送りのことばを述べることになろうとは。千年の昔から，人との死別のなかでも最も痛ましいのは，年長者が年下の者の死に遭うこととか。この「前後相違の恨み」は綿綿として，なお尽き果てることがありませんが，インド哲学を修めた谷澤先生は，この私どもの執着のおろかさ・煩悩のつたなさを，にこやかなまなざしでたしなめておられるでしょうか。

このうえは，先生の学生教育に向けた熱い思いを胸にきざみ，そのご意志を継ぎ，学部教育研究の一層の充実・発展に向け不断の努力を重ねることをお誓いし，思い尽きせぬお別れのことばに代えさせて戴きます。

亡き 谷澤淳三先生の御霊・ご尊霊よ，どうぞ安らかにお眠り下さい。そして，あなたの最愛の奥様・お嬢様を，その温かい慈愛の御心でお守り下さい。